The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日韓同性間の会話における不同意・否定的評価の相互行為 : ジェンダーとポライトネスの観点からみる対立と冗談
Author(s)	張, 允娥
Citation	阪大日本語研究. 2017, 29, p. 101-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60633
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』29（2017）

日韓同性間の会話における不同意・否定的評価の相互行為
―ジェンダーとポライトネスの観点からみる対立と冗談―

Disagreement and negative assessment in same-sex Japanese and Korean conversations: Conflict and joking from the perspectives of gender and politeness

張 允娥
JANG Yun Ah

キーワード：自由会話、不同意、否定的評価、ジェンダー、ポライトネス、インポライトネス

要旨

本研究では、日韓の親しい間柄の男性同士と女性同士の自由会話（日韓それぞれ男性4組、女性4組、計16組）を収集し、それぞれ約30分～35分の文字化データから〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話が、①一時的な「対立」関係を形成した場合と、②「冗談」として用いられた場合の相互行為に見られるジェンダー差を明らかにすることを目的とした研究である。分析の結果は、以下のようにまとめられる。

A）〈不同意〉と〈否定的評価〉発話は、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で多く観察される。

B）女性同士の会話で「対立」はトラブル源になり、女性同士は交渉を通じて一致点を探すことで「対立」を解決する。一方、男性同士の会話で「対立」はトラブル源にならない場合もあり、交渉に失敗して二人の意見の差が縮まらないまま会話を展開させる相互行為も観察される。

C）女性同士の会話では「冗談」は一方的に相手をからかうような相互行為で行われるが、男性同士の会話では「冗談」として相手と言い争うような相互行為が行われる。

D）ジェンダーによる相違が見られる背景には、どのような装置を用いて、友人に配慮し、親密な関係を構築していくかという親密な関係作りの仕方の相違が要因としてあると考えられる。

1. はじめに

相手の発話に対する不同意の表明や、相手の思考や行動に対するけなしや非難のような否定的評価の発話は、言い争いによく見られる発話行為で、あからさまな〈不同意〉や〈否定的評価〉は（以下では、本稿で分析する不同意と否定的評価に言及する際は〈〉に入れる）、相手との「対立」関係を形成する。Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論の観点からみると、〈不同意〉や〈否定的評価〉は、侵害されたくないネガティブ・フェイスと好ましく思われたいというポジティブ・フェイスの両方を侵害するFTA（Face Threatening Act）であり、インポライトな行為として捉えられる。親密な関係を構築してきた友人同士の会話では、（1）

のように相手の意見や感情に対して不同意を表したり、相手の思考や行動に対して否定的な評価を行ったりすることがある[1)]。

（1）会話MK3【日本に就職するKBM5が韓国に帰ってくることについて】

01　KBM5:나는 외국으로 취업을 하기　문에 남은 나머지 시간을 한국에서 보내고

02　　싶어@（2.0）만나야 될 사람들이 많어 유럽으로 가면 그것도 그렇고 가족하

03　　고 지낼 시간이 없단 말야（私は外国に就職するから残った時間は韓国で過ごしたい@（2.0）合わなければならない人が多い（(旅行で)）ヨーロッパに行くとそれもそうだし　家族と過ごす時間がないんだよ）

04→KCM6:<u>존</u>나 가깝잖아 맨날 오면 되지 주말마다（(<u>すご</u>く近いんでしょう　しょっちゅう帰ってきたらいいでしょう　毎週末）

05→KBM5:그래도 해외에서 많아 봤자 일년에 세네번이야 많아 봤자（でも　海外からしょっちゅうっていっても一年に3、4回だよ　しょっちゅうっていっても）

06→KCM6:에유: 니가 시간만 있으면 올 수 있어 돈이 많이 나가서 그렇지＝（はあ:あなたが時間さえあれば来れるよ　お金がかかるのがあれだけど＝）

07→KBM5:＝돈 아껴야지 그러니까 뭐 저가항공 저번처럼 18만원 하면 올 수 있지

08　　올 수 있기야（＝お金貯めないと　だから　まあ　格安航空　前みたいに18万ウォンなら来れるけど）

（1）のように、相互行為の中で〈不同意〉や〈否定的評価〉が相手との一時的な「対立」関係を形成した場合、会話の参加者は「対立」を解決するためのストラテジーが必要となる。一方、（2）のように、表面上インポライトに見える〈不同意〉や〈否定的評価〉が、実は相手のフェイスを傷つけることを目的とせず、友人同士の会話で参加者が「対立」を「冗談」として捉え、親密さを表すストラテジーとして用いる場合もある（Culpeper 2011、Pilkington 1998、大津 2004、今田 2015）。

（2）会話MJ4【花火について】

01　JDM7:なんも気にせずに

02　JYM8:なるほ［どな　じん］

03　JDM7:　［「そっち行っちゃ」だめですよ:」みたいな　こっちでっつって（0.3）

04　　めっちゃよか［った］

05→JYM8:　　［まあ］でも　ちょっとびくびくしながら花火すんのも　まあ　夏

06　　の風物詩っちゃ［風物詩やろ］
07 →JDM7:　　［＠＠＠＠］でも　もう　なんか　そこ通り過ぎた〈＠感じやね
08　　ん＠〉＠〈＠もうそのへんは　なんか＠〉 中高生あたりやろ＠
09　JYM8:「は::い」みたいな　もう今やったら「は:い　ごめんなさい」で終わるけどな

（2）のように〈不同意〉や〈否定的評価〉が笑いを生み出す「冗談」として用いられているのであれば、これらの発話は相手のポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネス・ストラテジー（以下、PPS）に相当する。また、相手のフェイスを傷つけることを目的としない見せかけのインポライトネス（mock impoliteness）としても捉えられる（Culpeper 2011）。このように、〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話は相互行為の中で「対立」関係を形成したり「冗談」として用いられたりするが、従来ジェンダーと言語使用の関係を探った多くの研究では、女性より男性の方があからさまな不同意や反論を表すことが多いと指摘されている（Goodwin 1980、Holmes 1995、Pilkington 1998）。親密な関係を構築してきた日韓の男性同士の会話と女性同士の会話に見られる〈不同意〉や〈否定的評価〉の使用頻度と相互行為にも日韓差よりはジェンダー差が顕著に見られるが、本稿では、ジェンダー差の観点から、日韓の男性同士の会話と女性同士の会話における〈不同意〉と〈否定的評価〉に焦点を当て、これらの発話が会話の中で、①一時的な「対立」を形成した場合の相互行為と、②「冗談」として用いられている場合の相互行為を分析し、男性同士と女性同士の相互行為に見られる類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成としては、まず、§2で会話における「対立」と「冗談」に関する研究をまとめた後、本稿の目的について述べる。§3では、調査概要と分析項目について説明する。§4では分析結果について述べ、§5では考察を行う。§6では、まとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究と研究目的

ここでは、§2.1で〈不同意〉や〈否定的評価〉に関する先行研究について述べた後、§2.2で、本稿の目的について述べる。

2. 1. 先行研究

会話は基本的に「質問 - 応答」「依頼 - 受諾/拒否」などのような第1ペアと第2ペアという「隣接ペア（adjacency pair）」によって構成される（Schegloff & Sacks 1973）。第1ペアに対する第2ペアのあり方は一つではない場合が多く、たとえば、「依頼-受諾」と「依頼-拒否」

という二つの連鎖があり得る。この場合、「受諾」は選好（preferred）される応答であるのに対し、「拒否」は、選好されない（dispreferred）応答である（Levinson1983）。Levinson（1983）によると、選好されない応答が発話される場合に見られる特徴には、沈黙や前置き、なぜ選好されない応答をするのかに関する説明、第１ペアに応じた間接的な拒否がある。本稿で取り上げる〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話は、〈同意〉と〈肯定的評価〉と対になる選好されない応答であり、これらの発話は相手のフェイスを侵害し「対立」関係を形成する場合がある。

会話分析では、相手の発話を理解できなかったり、聞き取れなかったりする問題が起こった場合、問題となった対象を「トラプル源」と呼び、問題を解決する手続きを「修復」という。すべての理解や聞き取りの問題がトラブル源になるわけではないが、問題が発生したと会話の参加者が認識した場合、参加者はいったん会話の流れから外に出て、修復を行って問題を解決した後、本来の流れに戻る。会話の流れから外に出て問題を解決する手続きを要するのは、理解や聞き取りの問題だけではない。選好されない応答である〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話が用いられた場合、会話の参加者は相手との「対立」を解決するために交渉を行った後、本来の流れに戻ることがある。会話の流れから外に出て問題を解決する手続きを要するという点で、修復と交渉の手続きは共通すると考え、本稿では〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話が会話の進行に問題を起こし、会話の参加者が交渉を行っている場合、問題を起こした発話をトラブル源と呼ぶことにする。

「対立」に関する研究は、大きく三つの観点から研究されてきた。まず、論争や討論の場面における対立行為を分析し、そこで用いられる表現形式に焦点を当てた研究（Maynard 1985、本田 1999）、ジェンダーの観点から不同意や反論を表明する発話の使用頻度を分析した研究（Goodwin 1980、Holmes 1995、Pilkington 1998）、会話の中で「対立」が「冗談」になる場合を分析した研究（Schiffrin 1984、Straehle 1993、大津 2004、今田 2015）に分けられるが、ジョーンズ（1993）によると、論争や討論の場面での「対立」とは異なって、日常的な会話では遊びとしての「対立」が観察されることが多い。以下では、相互行為の中で「対立」を形成する不同意や反論また否定的評価の発話をジェンダーの観点から分析した研究と、「対立」を表す発話が相互行為の中でどのように「冗談」として捉えられるのかを分析した研究を中心にまとめる。

2. 1. 1. 会話における対立とジェンダー

まず、ポライトネスの観点から様々な場面における男女の言語使用を分析したHolmes（1995）では、女性に比べ、男性は相手に対する不同意や反論を表現することが多いと指摘さ

れている。このような傾向は、子供の会話でも観察されるが、Goodwin（1980）によると女児同士の会話に比べ、男児同士の会話では、相手にあからさまな反論を表したり、相手を脅したりすることが多い。相手に不同意を表す発話にもジェンダーによる差が見られるが、Maltz and Borker（1982）によると、男性に比べ女性は不同意を表す発話を弱める傾向が強い。Pilkington（1998）は、男性同士の会話では、俗語の使用やあからさまな反論が多いと指摘しており、男性同士の会話におけるあからさまな反論は、親密感を表すストラテジーとして用いられる場合もあると述べている。男性のラグビーチームの会話を分析したKuiper（1992）でも、性的な侮辱はグループの連帯感を強めるストラテジーとして用いられていることが指摘されている。また、会話における俗語の使用を分析したDaly et al.（2004）は、特定の文脈では攻撃的だと捉えられる俗語の使用は、男性同士の会話では親密な人間関係の証拠として現れると指摘している。このように、俗語を用いて攻撃的な態度を示したり、相手に反論を表したりする行為が逆に連帯感を強めたり、親密感を表すことは、自由会話における「対立」を分析したSchiffrin（1984）でも指摘されている。Schiffrin（1984）によると会話の参加者は互いに「対立」して反論したりするが、それは深刻な言い争いではなく、親密感を表す方法である。このように、インフォーマルな場面における「対立」は、相手のポジティブ・フェイスに配慮した「冗談」として用いられる場合がある。それでは、相手との「対立」関係を形成する発話は、どのようにして「冗談」になるのか。

2. 1. 2. 冗談としての対立

会話における「対立」がどのような場合「冗談」になるのかという現象を説明するためStraehle（1993）と大津（2004）は、フレームの概念を採用している。フレームは、Bateson（1972）による概念であるが、Goffman（1973:21）は、フレームとは、無意味な出来事の流れから、何等かの意味のあるものへ変化させる働きをもつものであり、連続する出来事の中で一部を組織立てて経験する際の一種の原理であるとしている。また、Tannen & Wallat（1993：60）によると、発話を理解するために聞き手（話し手）はいかなるフレームが意図されたかを理解する必要がある。たとえば、ある発話が冗談であるか、攻撃（fighting）であるかもそうであり、冗談として用いた発話がもし侮辱に解釈された場合は喧嘩の原因になる。会話における意味は、それぞれの発話の情報的あるいは指示的内容だけではなく、メタ・メッセージまた会話の参加者の互いに対する態度や参加者が話している場面によって伝わる（Tannen 1986）。メタ・メッセージとは、会話の参加者の相手に対する気持ちや相互行為についてのメッセージであるが、Bateson（1972）は、メタ・メッセージを考慮しなければ、いかなるメッセージも解釈できないと指摘している。Straehle（1993）は、メタ・メッセージとフレームは、会話の

参加者が発するコンテキスト化の合図（contextualization cues）を通じて理解されると指摘しており、Gumperz（1982）によると、コンテキスト化の合図は、相互行為の中でフレーム化を可能にしたり、個人の発話が何であるか（冗談か真剣かなど）を理解できるようにする要素である。Straehle（1993）と大津（2004）は、「対立」を形成する発話を「冗談」のフレームに移行させるため、話し手は「これは遊びだ」という「メタ・メッセージ」を発すると指摘している。大津（2004、2007）によると、「発話の繰り返し」、「韻律の操作」、「感動詞の使用」、「スタイル・スイッチング」、「笑い」が、「対立」を表す発話が「冗談」であることを伝えるコンテキスト化の合図として用いられる。また、提案に対して反対表明が行われる際の発話を分析した椙本（2004）では、反対の発話を冗談のように伝えるため、笑いながら発話したり、極端にくだけた表現を用いたりすることが指摘されている。

以上、相手に対する「対立」の表明は、相手のフェイスを侵害する場合もあれば、コンテキスト化の合図を伴って「冗談」として用いられ、（2）のように会話の参加者が「対立」を楽しんでいる場合もある。しかし、相互行為におけるジェンダー差を探った研究では、相手の発話に対する不同意や否定的評価の発話の使用における相対的なジェンダー差や男性同士の会話で反論や俗語の使用が連帯感を強めていることは明らかにされているものの、不同意や反論または否定的評価が相手との「対立」を形成した場合、男女が「対立」をどのように解決していくのかという観点からの分析とこれらの発話が「冗談」として相互行為の中でどのように用いられているかというプロセスまでは詳しく分析されていない。そこで、本稿では、日韓の親密な人間関係を構築してきた同性間の自由会話をデータとし、日韓差よりジェンダー差が顕著に見られる〈不同意〉と〈否定的評価〉の相互行為に注目する。具体的には、①これらの発話が「対立」を形成した場合の相互行為と、②「冗談」として用いられた場合の相互行為に焦点を当て、これらの発話が実際に相互行為の中でどのように用いられているか、これらの発話の使用頻度と相互行為に見られるジェンダー差を探ることを目的とする。

2. 2. 研究目的

本稿で扱う日韓の同性間の自由会話のデータは、日韓男女の親密な間柄の自由会話におけるポライトネスのあり方を探る目的として収集したものであるが、本稿では、ジェンダー差に焦点を絞り、以下のような点を明らかにする。

A）親密な人間関係を構築してきた男性同士と女性同士の会話における〈不同意〉と〈否定的評価〉の使用頻度にはどのような類似点と相違点が見られるのか。

B）男性同士と女性同士の会話で〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話が「対立」を形成する場合、「対立」を解決するために見られる相互行為にはどのような類似点と相違点がある

のか。

C）〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話は「冗談」としてどのように用いられており、男女の「冗談」の相互行為にはどのような類似点と相違点が見られるのか。

D）「対立」を解決するための相互行為と「冗談」の相互行為にジェンダーによる類似点と相違点が見られる場合、その理由は何か。

（A）と（C）に関連して、〈不同意〉と〈否定的評価〉が何に対してなされており、「冗談」であることを伝えるため、どのようなコンテキスト化の合図が使用されているかという面からの分析も必要であり、これに関しては日韓差が顕著である。日韓対照研究では、一般的に日韓差が注目されるが、日韓のあいだでそれぞれ男性、女性の行動が類似し、むしろ、それぞれの文化のなかでのジェンダーの違いの方が大きい場合もある。本稿ではそのような事例に注目するものである。日韓差についてはあらためて分析を加えることにし、まず、本稿では、使用頻度と相互行為に見られるジェンダー差に焦点を当て、「対立」と「冗談」の相互行為を分析した結果について述べる。

3. 調査概要と分析項目

ここでは、会話の調査概要について説明した後、本稿で分析対象とする〈不同意〉と〈否定的評価〉、および、「対立」と「冗談」とは何かについて説明する。

3. 1. 会話データの調査概要

本稿の目的は、日韓の女性と男性が同性の友人との相互行為の中で、選好されない応答である〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話がなされて相手との「対立」関係を形成する場合、それを解決するための相互行為と、「冗談」としてこれらの発話が用いられた場合の相互行為にどのようなジェンダー差が見られるのかを明らかにすることである。つまり、男女が友人のフェイスにどのように配慮し、親密な人間関係を構築していくのか、女性同士と男性同士の会話にみられる親密な人間関係の構築の仕方や配慮の仕方には、どのような類似点と相違点があるのかを明らかにすることである。そのため、本稿では、特にコントロールしないで収集した友人同士の日常的な自由会話を分析資料とする。日本語の調査の詳しい協力者の情報などを表１ に、韓国語の調査情報を表2にまとめる。

表1　日本語調査の情報

会話	話者	年齢	性別	出身地	場所	録音時間	調査年・月
FJ1	JOF1	24	女	兵庫	空室	50分10秒	2012年12月
	JAF2	24	女	兵庫			
FJ2	JSF3	27	女	兵庫	カフェ	48分15秒	2012年09月
	JKF4	28	女	大阪			
FJ3	JDF5	21	女	兵庫	カフェ	56分24秒	2016年03月
	JGF6	22	女	大坂			
FJ4	JMF7	28	女	兵庫	カフェ	54分10秒	2013年02月
	JTF8	28	女	兵庫			
MJ1	JAM1	22	男	大阪	空室	55分50秒	2012年11月
	JBM2	22	男	大阪			
MJ2	JTM3	25	男	大阪	カフェ	52分10秒	2013年05月
	JSM4	26	男	大阪			
MJ3	JKM5	22	男	京都	空室	60分22秒	2015年11月
	JNM6	20	男	兵庫			
MJ4	JDM7	22	男	大阪	空室	53分10秒	2012年12月
	JYM8	22	男	大阪			

表2　韓国語調査の情報

会話	話者	年齢	性別	出身地	場所	録音時間	調査年・月
FK1	KAF1	22	女	仁川	カフェ	66分40秒	2013年02月
	KBF2	23	女	ソウル			
FK2	KSF3	28	女	ソウル	カフェ	51分40秒	2012年08月
	KHF4	27	女	ソウル			
FK3	KYF5	28	女	高陽	カフェ	90分47秒	2014年11月
	KKF6	28	女	ソウル			
FK4	KCF7	24	女	ソウル	カフェ	49分54秒	2013年07月
	KDF8	24	女	ソウル			
MK1	KGM1	23	男	ソウル	カフェ	50分13秒	2012年10月
	KAM2	23	男	ソウル			
MK2	KHM3	27	男	ソウル	カフェ	56分30秒	2012年12月
	KDM4	28	男	ソウル			
MK3	KBM5	22	男	安山	食堂	59分48秒	2015年11月
	KCM6	22	男	安山			
MK4	KJM7	23	男	ソウル	カフェ	70分30秒	2015年05月
	KKM8	23	男	ソウル			

協力者には、普段から親しくて、自らのことを打ち明けることができる友達と自由に話す会話を50分くらい収録したいと前もって伝えており、データの扱いについて協力者から承諾を得ている。そして、研究の詳細は知らせず、日本語と韓国語の対照を行うためにデータを収集していると伝えた。日本語の会話の収録は大阪で、韓国語の会話の収録はソウルと京畿道で行った。録音の場所は、協力者に普段どこでおしゃべりするかを尋ね、自然な状態でデータを収録することを優先したが、どこでも良いと答えた場合は、できるだけ静かな場所で収録を行った。

本稿では、以上のような方法で女性同士と男性同士の親しい間柄の会話を各々約50～90分ずつ録音し、会話のうち発話が自然ではないと思われる最初の部分と最後の部分を除いたそれぞれの30分～35分くらいを文字化し[2)]分析対象としている。

3. 2. 分析項目

本稿では、次のような発話を〈不同意〉と〈否定的評価〉と認定して分析を行う[3)]。

・〈不同意〉

〈不同意〉の発話は、相手の先行発話について、同様な意見あるいは感情を持っておらず、反対あるいは納得していないことを表す発話であるとする。〈不同意〉は、先行する相手の発話に対するものであるため、〈不同意〉の対象になる相手の先行発話が必ず必要になる。（(3）の不同意の02行目の発話は、先行する01行目の発話に対するものである）

（3）会話FJ1【ドラマのセリフについて】
01→JAF2:かっこいい:
02→JOF1:〈@かっこよくないよ　別に@〉　@　〉〈@好きなの？@〉〈
03　JAF2:〈@決めゼリフ？@〉

椙本（2004）によると、反対の伝え方には、（3）のように断定的な発話で反対を表すもの、「いや、でも」のような談話標識が伴うもの、自らの発話を繰り返し強調するもの、反対の理由を述べるもの、「気がする」などの表現や問いかけることで意見の押し付けを弱めるものがあるが、〈不同意〉の発話には、このような特徴が見られており、Levinson（1983）が指摘したように、選好されない応答であるため、沈黙が観察されることも多い。

・〈否定的評価〉

林（2015）は、否定的評価を「会話の相手と、相手に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけ、それを表現すること」と定義し、けなしや批判、冗談（批判的な内容を含むもの）、ツッコミ等の発話行為すべてを含み、否定的評価の発話として認めている。本稿でも、〈否定的評価〉は、相手の思考や行動あるいは性格や所有物などについて、マイナス評価を表す発話であるとするが、〈否定的評価〉の発話は、〈不同意〉とは異なって相手の先行発話に対して反対を表すものではなく、相手の性格や発想あるいは行動や所有物などに対して低く価値づけて否定的に評価する発話であるとする。（（4）は、相手の行動（寝たという行動）に対する否定的評価の発話である。）

（4）会話FJ2【映画について】
01　JKF4:アメリ　アメ［リとか見た］ことないん？
02　JSF3:　　［あ　アメリ］　　アメリ見たけど寝た
03→JKF4:@@　〈@あ::　本当あかんな@〉
04　JSF3:@@　アメリって　あれ　〈@声　あんまない感じだけ？@〉

以上のような発話を〈不同意〉と〈否定的評価〉に分類し、〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話後の会話の参加者の相互行為を分析対象とする。

・「対立」と「冗談」

次に、§2.1で述べたように、相互行為の中で〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話は、「対立」

を形成したり、「冗談」として用いられたりする。これらの発話が「冗談」として用いられている場合、笑い、音の伸ばしや発話の大きさと速さを調整した音律の操作、発話の繰り返しや感動詞の使用による感情や程度の誇張などのコンテキスト化の合図が観察されることが多い。「冗談」を言う側は、コンテキスト化の合図を用いることで「対立」が「冗談」であることを相手に伝えるが、Straehle（1993）が指摘したように、これらの発話が「冗談」であるかどうかは、受け手側が相手の発話を「冗談」として認めているかどうかが大きく関わる。受け手側が〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話を真面目に捉えた場合、これらの発話は「対立」関係を形成することになるが、これらの発話を受け手が「冗談」として認める場合は「冗談」フレームが構築されることになる。

このように、〈不同意〉と〈否定的評価〉が「対立」関係を形成するか「冗談」として認められるかは、会話の参加者の共同作業で行われるが、本研究では、〈不同意〉と〈否定的評価〉の相互行為に注目し、受け手側が〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話に何の反応も見せなかったり、その発話を真面目に捉えたりする場合の発話は「対立」を形成した発話として分類する。そして、受け手側が相手の〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話を「冗談」として捉え、笑いが生じたり、その発話を深刻に捉えていないような態度を示したりする場合は「冗談」の発話として認める。

4. 分析結果

本節では、分析結果について述べる。まず、§4.1 では、日韓男女の会話における〈不同意〉と〈否定的評価〉発話の使用傾向について述べた後、§4.2 と §4.3 では、男性同士の会話と女性同士の会話における「対立」と「冗談」の相互行為にどのような類似点と相違点が見られたかについて述べる。

4. 1.〈不同意〉と〈否定的評価〉発話の使用傾向

ここでは、男性同士と女性同士の会話における〈不同意〉と〈否定的評価〉発話の使用傾向について述べる。

4. 1. 1. ソロパートとデュオパートにおける使用傾向

まず、〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話が男性同士と女性同士の自由会話でどのくらい用いられているかについて述べる。表 3 は、一人の話者が発話権を維持して語るソロパートと二人の会話の参加者が共同で話し合うデュオパートにおける〈不同意〉や〈否定的評価〉の使用数

を示したものである[4)]。

表3　それぞれのパートにおける〈不同意〉と〈否定的評価〉

	JF		JM	
	ソロ	デュオ	ソロ	デュオ
不同意	0	10	5	35
否定的評価	2	6	9	19
計	18		68	
	KF		KM	
	ソロ	デュオ	ソロ	デュオ
不同意	0	9	11	32
否定的評価	1	19	3	26
計	29		72	

表3からは、以下のことが確認できる。

(a)〈不同意〉や〈否定的評価〉は、女性同士の会話に比べて男性同士の会話で多く観察される。

(b)〈不同意〉や〈否定的評価〉は、会話の参加者の実質的な発話数に大きな差が見られず、互いに意見や感情を話し合うデュオパートで発話されることが多い。

(c)女性同士の会話で〈不同意〉の発話は、デュオパートでしか観察されないのに対し、男性同士の会話では、ソロパートでも観察される。

4. 1. 2.「対立」と「冗談」としての〈不同意〉と〈否定的評価〉

次に、〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話が相互行為の中で「対立」を形成した場合と「冗談」として用いられた場合をまとめて示すと表4のようになる。

表4　対立と冗談として用いられた〈不同意〉と〈否定的評価〉

	対立		計		冗談		計		計
	不同意	否定的			不同意	否定的			
JF	5	0	5	28%	5	8	13	72%	18
KF	5	2	7	24%	4	18	22	76%	29
JM	25	0	25	37%	15	28	43	63%	68
KM	26	15	41	57%	17	14	31	43%	72

表4からは、以下のことが確認できる。

（d）韓国の男性同士の会話を除いては、〈不同意〉と〈否定的評価〉は「冗談」として用いられる割合が高い。

（e）女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では〈不同意〉と〈否定的評価〉が「対立」を形成する割合が高い。

以上のような使用傾向は、会話の参加者が〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話を相互行為の中でどのように用いているかと大きく関連するが、以下の§4.2と§4.3では、実例を挙げ具体的に男性同士と女性同士の会話における「対立」と「冗談」の相互行為にどのような特徴が見られたかについて述べる。

4. 2. 対立の相互行為とジェンダー

相手に対する〈不同意〉の発話が「対立」として用いられる場合、この発話は相手のフェイスを侵害する行為になる。この場合、会話を円滑に進行させるためにFTAを遂行した参加者とフェイスを侵害された参加者の双方が交渉をすることになる。〈不同意〉の発話の後に見られる交渉の相互行為には、大きく二つのパターンがある。まずは、異なる意見を一致させた後、会話を展開させるパターンと、もう一つは異なる意見を一致させず、会話を進行させるパターンである。女性同士の会話では1例を除いては前者のパターンしか見られないが、男性同士の会話では、後者のパターンが多く観察される。以下では、女性同士の会話と男性同士の会話における〈不同意〉の発話後の相互行為にどのような特徴が見られるかについて述べる。

4. 2. 1. 交渉による展開と一致

まず、「対立」を解決するため会話の参加者が交渉を行い、二人の異なった意見を一致させるパターンについて述べる。日本の女性同士の会話の用例を見てみよう。

（5）会話FJ2【飛行機が落ちることについて】

01　JKF4:私も倹約しよ　どこ行っていつか何があるか分からん（2.6）　ええ　ＸＸに

02　　私本当に飛行機で死ぬのいややな

03→JSF3:死なへんって

04→JKF4:〉落ちたら死ぬやん〈=

05　JSF3:　　=落ちたら死ぬけど　よ::言う［やろ］

06　JKF4:　　［@@］

07　JSF3:宝くじが当たる［より］

08　JKF4:　　［あ::］
09　JSF3:落ちにくいって
10　JKF4:え？　宝くじが当たる（0.8）より
11　JSF3:宝くじが当たるより飛行機乗って落ちる方が＝
12→JKF4:　　＝確率低いか（1.2）そうやんな::
13　　そのためにみんなチェックしてんねん［XXな］

（5）は、飛行機の事故について話している場面である。「対立」は、JSF3の〈不同意〉の発話（03行）から始まるが、〈不同意〉の発話の対象になるのは、先行するJKF4の「飛行機で死ぬのいややな」（02行）である。JSF3の〈不同意〉の発話（03行）に対して、JKF4が〈不同意〉を表す（04行）ことによって二人は一時的に「対立」するが、JSF3が積極的に自らの意見の根拠を話し（05～9行）、JKF4がそれに同意する（12～13行）ことで「対立」は終了している。韓国の女性同士の会話でも（6）のような用例が見られる。

（6）会話FK2【一般的ではない話をする同僚と同僚の彼氏に会うことについて】
01　KHF4:나 마주친다고 만난다고 그럼 내가 얼마나 뻘쭘하냐（私ばったり会うんだって　会うんだって　だったら　私すごく気まずいでしょう）
02→KSF3:뭐 뻘쭘할건（まあ　気まずいことまでは）
----------ソロパート----------
03　KHF4:아니 그런거 말고도 그것만 얘기한게 아니라[…] 그 남자의 그런 중요한
04　　비밀 비밀이잖아（いや　そんなことだけではなくて　それだけ話したわけではなくて[…]その男のそんな大事な秘密　秘密でしょう）
05　KSF3:그치（そうだよね）
06　KHF4:그런 비밀까지 다 얘기하지 그리고[…] 내가 이런 얘기를 듣고 그 남자친
07　　구랑 마주쳤을때 되게 순순한 마음으로「어머 안녕하세여 언니 남자친구세
08　　여？」이럴 수 있겠냐（そんな秘密まで全部話す　そして　[…]　私がこんな話を　聞いてその男と会った時純粋な気持ちで「あら　こんにちは　お姉さんの彼氏で　すか？」って言えるか）
09→KSF3:그러게 そうだね

（6）の前の文脈でKHF4は、同僚が彼氏の個人的な事柄まで話していて困ると話している。01行で、KHF4は同僚の彼氏に遭遇する時もあるが、同僚から様々な話を聞かされているため、

彼氏に合うと気まずいと話している。ここで「対立」は、01行目の「彼氏に会ったら気まずいでしょう」という発話に対して、KSF3が〈不同意〉を表すことから始まる（02行）。KSF3の〈不同意〉発話はトラブル源になり、その後に見られる相互行為でKHF4は、同僚の彼氏に会ったら気まずくなるしかない理由として、その同僚が話したことをより具体的に物語っている（03～04行、06～08行）。 KHF4が気まずくなるしかない理由を語ることからも分かるように、KHF4が伝えたかったのは「同様に彼氏の個人的な事柄まで聞かされるのが嫌だ」ということであるが、より具体的な話を聞いたKSF3は、自らの意見を修正し、KHF4に同意していることを表している（09行）。

（5）と同様に（6）も、会話の参加者は互いの異なった意見を一致させることで「対立」を終了させている。このように、女性同士の会話で〈不同意〉の発話は、単なる意見の提示として捉えられることはなく、解決すべきトラブル源になる。そして、〈不同意〉の発話に続く女性同士の相互行為は、FTAを遂行した参加者あるいはフェイスを侵害された参加者の一方が、そのような考えや感情を持つようになった経緯や理由などについて積極的に話し、一方がそれに同意するというパターンで行われる傾向がある。

4. 2. 2. 交渉の失敗と展開

次に、男性同士の会話でも、交渉を行って意見の一致に至った用例も観察されるが、女性同士の会話とは異なって、男性同士の会話では、相手との意見差を縮め、一致させようとする交渉は見られるものの、意見の一致点までは達成されず、曖昧な反応を見せ「対立」を緩和する用例（§4.2.2.1）と、相手の〈不同意〉に触れず会話を展開させていく用例（§4.2.2.2）が見られる。

4. 2. 2. 1. 曖昧な反応：同意も不同意もしない

男性同士の会話では、交渉は行われているものの、意見の一点が見つからない場合、曖昧な反応を見せ、「対立」を緩和しようとするストラテジーが見られる。まず、日本の男性同士の会話の用例を見てみよう。

（7）会話MJ1【演劇にかかった費用について】

01　JAM1:あれ　でもめっちゃお金かけたでしょ　たぶん

02　JBM2:西部劇？

03　JAM1:西部劇じゃない　剣とか作るのにさ

04　JBM2:あ　あっち?

05　JAM1:そう
06　JBM2:あ　そうなん?
07　JAM1:え?
08→JBM2:木ってそんなかかるん?
09→JAM1:（4.0）え　あれ　結構　おれお金かかってると思ってたんだけど
10　JBM2:まじか
11　JAM1:実際は知らない［んだ］
12　JBM2:　　［お金］取られたっけ　徴収された　あ＝
13　JAM1:＝けっ　そんな　なんか　う::ん　ちょっとは　された かもしれないけどあ
14　　んまりめちゃく［ちゃされ］
15→JBM2:　　［そんな］金かかるもんなん?
16→JAM1:（5.0）剣は結構かかったと思っていた＝
17→JBM2:　　＝木にアルミホイル貼って「はい」やろ
18→JAM1:そうそう　木にアルミホイル貼って　だって　それ練習用に　まあ　同じの
19　　ではないけどさ
20→JBM2:あ::
21→JAM1:練習用を買って　もう一回　なんか　本番用作って　なんか 「二度手間じ
22　　ゃね:かこれ」とか思ってたら本当に何か本番で折れて 「お::　折れるのかこ
23　　れ」とか思ったもん@
24　JBM2:@@いや::　文化祭はおもろかったな::　高三に限っては@@

（7）は、高校の時、演劇で使われた剣について話している場面である。JAM1は、剣を造るために多くの費用がかかったと話しているが（01行）、JBM2はそれについて納得していないことを表現している（08、15、17行）。それぞれのJBM2の〈不同意〉の発話とJAM1の反応の間に見られる長いポーズ（09、16行）は、JAM1が答えに迷っていることを表していると考えられるが、JAM1は、二回も「お金が結構かかったと思っていた」とJBM2の〈不同意〉に反する意見を話している（09、16行）。JBM2は、お金を徴収されたかどうかと、木の作り方を、「木を作るのに費用はかかっていない」根拠として話している（12行と17行）。18行目で、JAM1は「そうそう」と同意を表しているが、その続きの発話「だって　それ練習用に　まあ同じのではないけどさ」で分かるようにJAM1の「そうそう」の発話は、木にアルミホイルを貼るという意見に対する同意であり、費用に関する意見に対する同意ではないことが分かる。また、「だって　それ練習用に　まあ　同じのではないけどさ」に対するJBM2の発話「あ::」

は、同意も不同意も表さない発話である。この「対立」は、JBM2が「あ::」と曖昧な反応を見せた後、JAM1が話題を変更することによって終了する（21～23行）が、このような曖昧な反応は韓国の男性同士の会話でも見られる。

（8）会話MK2【喧嘩した人について】

01　KDM4:근데 지가 다행히 또 잘 받아들이고 사과도 하더라고 미안하다고（でも　あいつが幸いにちゃんと受け入れて謝った　ごめんって ）

02→KHM3:미안할 건 없지（謝ることはない）

03　KDM4:아 근데 난 그날 되게 짜증났었어（9.0）오늘도 봐봐[…] 결국 형이

04　　나한테 연락을 하게 만들잖아（あ　でも　私はあの日すごくいらいらしてた（9.0）今日もそう[…]結局お兄さんが私に連絡するようにするじゃない）

05→KHM3:난 모르겠다（ 私には分からない）

（8）は、KDM4が知り合いと喧嘩したことについて話している場面である。02行でKHM3はKDM4の意見に〈不同意〉していることを明確に表現している。KDM4は、今日の出来事を取り上げ、自らの意見を正当化して、意見差を縮めようとしているが（03～04行）、KHM3は「私には分からない」と発話し、自らの意見を明確に表さない曖昧な反応を見せている。このように、男性同士の会話では、二人の意見差が縮まらない用例が多く見られ、その場合、自らの意見をはっきり表さない曖昧な反応を見せることによって「対立」を緩和しようとするストラテジーが観察される。

4. 2. 2. 2. 一方的な展開：不同意に触れない

次に、男性同士の会話では、交渉を行わず会話を展開させる用例も観察される。これらは相手の〈不同意〉の発話に触れず、自らの話を続ける場合である。（9）を見てみよう。

（9）会話MK2【オーストラリアに行くことについて】

01　KHM3:그냥 호주 가서 살까 이런 생각도 @@@ 근데 [일단]

（オーストラリアに行って住もうかという考えも@@@　でも［一応］）

02→KDM4:　　[그건]아니고

（[それは]違う）

03　KHM3:일단 [가보고]（一応［行ってみて］）

04→KDM4:　　[살진 말고]（[住むのはやめて]）

05　KHM3: 일단 가보고（1.0）왜 씨발 거 그건 있어 나도 돈 존나게 벌어가지구
　　（一応行ってみて（1.0）何だ　くそ　あれはある　私も　お金いっぱい稼いで）

（9）は、KHM3がオーストラリアに移民する意向があると話している場面であるが、KDM4は、KHM3の意見に同意していないことを表現している（02と04行）。KHM3は、自らの発話とKDM4の発話が重なっているため、自らの発話を繰り返してはいるものの、KDM4の〈不同意〉の発話には触れず自らの話を展開させている。会話全体を視野に入れれば、この場面はKHM3のソロパートで、KDM4は聞き手としての役割を果たしている場面であるが、話し手であるKHM3は自らの話を続けることを優先とし、KDM4の〈不同意〉の発話に触れず、話を展開させている。このように、男性同士の会話のソロパートで、聞き手が〈不同意〉の発話を用いた場合、話し手は〈不同意〉の発話をトラブル源とせず、自らの話を展開させていくパターンが観察されている。聞き手の〈不同意〉の発話に触れず、自らの話を展開させるパターンは日本の男性同士の会話でも観察されている。

（10）会話MJ4【お風呂に入ろうとし掃除したことについて】
01　JYM8:洗い終わって俺が寝たからしめしめ思て　そのままお湯入れて入ったやつお
02　　んねやん
03　JDM7: @@@@
04　JYM8:（0.4）ほんま　〉びびった「とっちめたし「ほんま〈　だ［れや」ゆうて］
05　JDM7:　　［@　@　@］
06　　@@@いや＝
07　JYM8:　　＝「そうゆう場合は入ったらあかんやろう」ゆうて
08→JDM7:@@（0.4）　いいやんか　入れ［たれよ］
09　JYM8:　　［「次の］日ちょっと濯いで（0.3）お湯張った
10　　すぐ入れたのに」ゆうて

（10）は、JYM8がお風呂に入ろうとして一所懸命にお風呂の掃除をしたが、疲れて寝てしまった出来事について物語っている部分である。次の日、お風呂に誰かが入った跡を見つけたJYM8は、07行目で「そうゆう場合は入ったらあかんやろう」と怒りの感情を表現している。08行目で、JDM7は笑った後「いいやんか　入れたれよ」と「入ったらあかんやろう」というJYM8の発話内容に〈不同意〉していることを表現しているが、JYM8は、JDM7の発話に重なって自らの物語をそのまま続けていることが分かる（09～10行）。

以上のように、男性同士の会話では、交渉に失敗する用例が多く見られるが、交渉に失敗した場合、「対立」を緩和するため、二人は曖昧な反応を見せるストラテジーを用いたり、相手の〈不同意〉の発話に触れず、自らの話を展開させたりする相互行為が観察されている。

4. 3. 冗談の相互行為とジェンダー

ここでは、〈不同意〉や〈否定的評価〉が「冗談」として用いられている場合について述べる。〈不同意〉と〈否定的評価〉が「冗談」として用いられている場合、笑い、スタイルシフト、音調の調節などといったコンテキスト化の合図が観察される。「冗談」の相互行為は大きく二つの種類に分けることができるが、一つは〈不同意〉や〈否定的評価〉の発話が笑いとともに発話され、相手をからかうようなパターンであり、もう一つは相手の〈不同意〉や〈否定的評価〉の発話に対して、さらに〈不同意〉や〈否定的評価〉を積み重ね、互いに言い争う形で冗談し合うパターンである。 以下の表5は、前者のパターン（単独）と後者のパターン（相互）が男性同士と女性同士の会話でどのくらい観察されたかをまとめたものである。

表5　冗談としての〈不同意〉と〈否定的評価〉

	単独		相互		計
	不同意	否定的	不同意	否定的	
JF	5	8	0	0	13
KF	3	17	1	1	22
JM	3	23	12	5	43
KM	1	7	16	7	31

表5で分かるように、相手を一方的にからかうようなパターン（単独）は男女の会話で多く観察されるパターンであるが、二人の参加者がお互いに〈不同意〉や〈否定的評価〉の発話を積み重ねて言い争うようなパターン（相互）は男性同士の会話では多く観察されるものの、女性同士の会話では、相手の〈否定的評価〉の発話に対して〈不同意〉を表現する用例が1例しか見られず、男性同士の相互行為とはまた異なった相互行為が観察されている。以下では、それぞれのパターンについて述べる。

4. 3. 1. 一方的な冗談：からかい

まず、女性同士の会話では、「冗談」する側が笑いを伴って〈不同意〉や〈否定的評価〉の発話が「冗談」であることを伝えつつ、一方的に「冗談」を言うパターンが主に観察される。

（11）を見てみよう。

（11）会話FJ3【JGF6がカメラを持っていることについて】
01　JDF5:一眼ってやつ持ってんの？
02　JGF6:持ってる
03　JDF5:うわ
04　JGF6:うん＠
05→JDF5:〈＠カメラ女子［や　今はやりのカメラ女子や］＠〉
06　JGF6:　　［＠　　＠　　＠　　＠］　〈＠やめろや＠〉［＠＠＠］
07　JDF5:　　［＠＠＠］
08　JGF6:〈＠あれやろう＠〉
09→JDF5:〈＠うん　［カメラ女子　ぶらさげて歩く］＠〉
10　JGF6:　　［ぶら下げて京都歩くみたいな］〈＠やつやろう＠〉＠
11→JDF5:〈＠カメラ女子やん＠〉

（11）は、JGF6がカメラを持っていることについて話している場面である。JGF6が一眼レフを持っていることを確認したJDF5は（01～04行）、笑いながら「カメラ女子」と発話を繰り返すことでJGF6をからかっている（05、09、11行）。ここで、「冗談」の受け手であるJGF6の反応を見てみると、笑いを伴って「やめろや」と発話することから「カメラ女子」という事柄を肯定的に捉えておらず、からかいとして捉えていることが分かる。JDF5のからかいに対してJGF6は、10行目で笑いながら「ぶら下げて京都歩くみたいなやつやろう」と積極的に「今はやりのカメラ女子」のイメージを具体的に描写することで、JDF5のからかいを受け入れていることを示している。韓国の女性同士の会話でも、（12）のように発話を繰り返すことで一方的に相手をからかうような相互行為が観察されている。

（12）会話FK2【同僚と同僚の彼氏を目撃したことについて】
01　KHF4:이렇게 했는데 분명히 남자는〈＠애써서 팔을 더 뻗었는데＠〉여기까지
02　　밖에 안오는거야 요만큼이 남는거야（こうしたけど　確かに　男は〈＠頑張って腕をもっと伸ばしたけど＠〉　ここまでしか届かない　このくらいが残る）
03→KSF3:〈＠너 되게 좋아한다＠〉너 되게 악마　같애 ＠＠＠＠（〈＠あなたすごく面白がっている＠〉　あなたすごく悪魔みたい＠＠）
04　KHF4:＠＠＠그래서 막 보면서「하하하하하」막 이럼서＠＠＠（＠＠＠それで見ながら

「はははははは（(笑い声)）」って＠＠＠（(嘲り笑ったという意味)）
05→KSF3:〈＠너 되게 악마［같다］＠〉（〈＠あなたすごく悪魔[みたい]＠〉）
06　KHF4:　　［〈＠그랬겠어？＠〉］＠（[〈＠そうしたと思うの＠〉]＠）
（(はははははって笑ったわけではないという意味)）
07→KSF3:〈＠되게　악마같다＠〉＠＠＠（〈＠すごく悪魔みたい＠〉＠＠＠）
08　KHF4:그랬겠어？〈＠[설마]＠〉（そうしたと思うの？〈＠[まさか]＠〉）
09→KSF3:　　［＠〈＠완전] 마녀같애＠〉＠＠＠（＠〈＠[本当に]魔女みたい＠〉＠＠＠）
10　KHF4:설마 그랬겠어？그냥 속으로（まさかそうしたと思うの？　内面でね）
11　KSF3:응＠（うん＠）

（12）は、KHF4が同僚と同僚の彼氏を目撃したことについて話している場面である。01行目で、KHF4は同僚の彼氏が同僚の腰を抱こうとしたが、その様子が不自然だったと話している。KHF4は、笑いながら同僚と同僚の彼氏の様子を描写しているが、それを聞いていたKSF3は、KHF4の様子を悪魔にたとえ大げさに話している（03行）。悪魔にたとえるのは、相手に対する否定的な評価であるが、KHF4は笑いながら発話することでこの発話が「冗談」であることを伝えている。KSF3の〈否定的評価〉の発話（03行）を聞いたKHF4は、04行で悪魔のような笑い声を出し「冗談」であることを認めている。その後、KSF3はからかいの発話を4回も繰り返して発話しており、09行ではKHF4を魔女ともたとえている。大津（2004）でも指摘されているが、このような発話の繰り返しは、感情を強調し、おおげさに表現することで、これは「冗談」であることを表す合図である。ここで、「冗談」の受け手に注目してみると、受け手であるKHF4は、「そうしたと思うの」と何回も発話し、自らの発話（04行）も冗談であったことを積極的に表現している（10行）。

このように、女性同士の会話では、受け手が「冗談」の対象になった事柄を否定したり、「冗談」をそのまま受け入れたりするパターンが繰り返し観察され、「冗談」を言う側が一方的に友人をからかうような相互行為が主に観察される。

4. 3. 2. 相互的な冗談：言い争い

次に、男性同士の会話では、〈不同意〉や〈否定的評価〉の発話に対して、また〈不同意〉や〈否定的評価〉の発話をし、お互いにそれを「冗談」として認め、楽しんでいる用例が見られる。まず、日本の男性同士の会話の一部を見てみよう。

（13）会話MJ1【話題になった知り合いについて】

01　JAM1:まあ　泉南 では〈@話題の@〉

02→JBM2:え　まじ？　そんな　そんなん話題になってる？〈@なってる？@〉

03→JAM1:@@　〈@おまえ　泉南にいね::［じゃん］@〉＝

04→JBM2:　［おれ］　＝〈@泉南におるおるおる@〉

05 →JAM1:〈@おまえ　泉南［にいね::じゃん］@〉

06 →JBM2:　〈@［おるおる］@〉 おれは泉南民やから

07　JAM1:下宿してるから知らないんでしょう　何か

（13）は、JAM1は地元で話題になっている同級生について話している場面である。会話の参加者の二人は、同じ地元（泉南）の出身であるが、JBM2は大学に進学してから下宿をしている。「冗談」は、02行目でJBM2がJAM1の発話に納得していないことを表すことで始まるが、JBM2は「なってる」と繰り返し発話しており、二回目の発話は笑いを伴っている。笑いを伴うことで、この発話は真面目な「対立」を表すのではなく、「冗談」であることを相手に伝えている。「冗談」の受け手であるJAM1は、笑いを伴って音律を操作しながら発話することで「冗談」であることを認めており（03行）、その後、二人は互いに相手の発話に対して笑いながら〈不同意〉の発話を積み重ねている（04～06行）。このように、男性同士の会話に見られる相手に対する〈否定的評価〉や〈不同意〉を表す発話の積み重ねは、深刻な「対立」を形成するよりは「冗談」としての言い争いである場合が多く、類似した用例は韓国の男性同士の会話でも見られる。

（14）会話MK2【誘いを断ったことについて】

01　KHM3:아:: 존나 오랜만이다 근데（あ::　すごく久しぶりだね）

02　KDM4:근까（そうだね）

03→KHM3:맨날 뺀찌 둔게 몇번이야 너

（いつも断ったのが何回か　あなた（(誘いに対する断り)）

04→KDM4:야 뭘 내가 야 씨발 너도 뺀찌 많이 놨거든（おい　何　私が　おい　くそ　あなたも断ったこと多いんだよ）

05→KHM3:@@내가 언제（@@　私がいつ）

06→KDM4:내가 전화했을 때 너 막 집에 있을때도 있고 회사하고 사람 만날 때도 있

07　었고 그거 말고도 몇 번 있어 내가 존나 전화했을 때〈@물론 내가 더 뺀찌

08　를 많이 놓긴 했지@〉（私が電話した時　あなた家にいる時もあったし　会社の人と

会っている時もあったし　それじゃなくても何回かあったよ　私すごく電　　話した時〈@もちろん私の方がもっと多く断った@〉)

09　KHM3:@@@@@

（14）は、二人が久しぶりに会ったことについて話している場面で、「冗談」はKHM3がKDM4の行動を批判することで始まる（03行）。批判に対し、KDM4はKHM3も同様であったと俗語を用い感情を誇張しながら批判するが（04行）、KHM3は笑った後、それに同意していないという反応を見せている（05行）。KDM4は、過去の事を言い出し反論するが、最終的に笑いながらKHM3の批判を受け入れている（07～08行）。それを聞いたKHM3は大きな声で笑いながら「冗談」として捉えていることを表している。

以上のような〈否定的評価〉や〈不同意〉の積み重ねは、男性同士の会話で繰り返し観察されるパターンであるのに対し、女性同士の会話で類似した用例は、韓国の女性同士の会話で1例観察されているだけである。しかも、女性同士の会話で観察された〈否定的評価〉や〈不同意〉の積み重ねの相互行為は、（15）のように〈否定的評価〉を受けた参加者が一つのターン内で〈不同意〉の発話を用いた後、すぐ自らの発話を取り消すような相互行為が観察されている。

（15）会話FK4【恋愛について】

01　KCF7:알바오빠들도 다 제정신이 아니야 근데 다 거기서 여자 사귀고 그래 왜 사

02　　귀는지 모르겠어（バイト先のお兄さんもみんな変だよ　でも　みんなそこで彼　　女ができたりする　何で付き合うのか分からない）

03　KDF8:@@ ×× 눈 맞는거지 뭐　（@@××惚れたんだよね　まあ）

04　KCF7:응（0.5）아무래도 그런 경우가 많지（うん（0.5）そういう場合が多いね）

05　KDF8:니네는 시간이 많다보[니까]（あなたたちは（(KCF7と彼氏)）時間多い［から］）

06→KCF7:　　[너도]잖아（［あなたも］でしょう）

07　KDF8:어（うん）

08→KCF7:아닌척 하지<마@>@@（((時間が)) ないふりす〈@るな@〉@@）

09→KDF8:아니〈@너보단@〉[@@〈@야아:::아아@〉@@]

（いや〈@あなたよりは@〉［@@〈@ねえ:::ええ@〉@@］((愛嬌のある呼びかけでやめてほしいことを表す))］

10　KCF7:　　［@　@　@　@　@］

（15）は、恋愛について話している場面である。KCF7が彼氏と付き合うことになった経緯をすでに知っていたKDF8は、05行目でKCF7がアルバイト先で彼氏と出会って付き合うことになったのは時間が多かったためであると話している。それに対して、KCF7は06行目と08行目で「あなたもでしょう　時間がないふりするな」とKDF8を批判するように発話している。受け手であるKDF8の09行目の発話を見てみると、KDF8は「いや　あなたよりは」と笑いながら〈不同意〉を表しているが、すぐ女性の愛嬌とされる音を伸ばした呼びかけ「야아 ::: 아아（ねえ ::: ええ）」を用いることで批判をやめてほしいことを表現している。このように、女性同士の会話で観察された〈否定的評価〉や〈不同意〉の積み重ねの「冗談」は、男性同士の会話で観察された言い争いのようなパターンとは性質が違った相互行為である。

以上のように、〈否定的評価〉や〈不同意〉の積み重ねによる言い争いのような「冗談」は男性同士の会話では繰り返し観察されるパターンであるものの、女性同士の会話では見られず、男性同士の会話に見られる言い争いのような「対立」は、（13）と（14）のように「冗談」である場合が多く、相手に自らの意見を貫こうとし、真面目に言い争っているというよりは、親密な関係作りに貢献する装置として解釈できる。

4. 4. 分析のまとめ

以上、本節では〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話は、女性同士の会話に比べ男性同士の会話で多く観察され、女性同士と男性同士の会話に見られる「対立」と「冗談」の相互行為には類似点と相違点があることについて述べた。§2.2で挙げた本稿の研究目的A~Cに合わせて分析結果をまとめると表6のようである。

表6　分析のまとめ

	「対立」関係が形成された場合	「冗談」として用いられた場合
類似点	・男女同様に「対立」を解決するため交渉が行われることが多い。	・〈不同意〉と〈否定的評価〉の発話は「冗談」として用いられていることが多く、コンテキスト化の合図が用いられている。 ・「冗談」は、一方的に相手をからかうような相互行為で行われる。
相違点	・女性同士の会話で「対立」はトラブル源になり、女性同士は交渉を通じて一致点を探すことで「対立」を解決する。 ・男性同士の会話ではトラブル源にならない場合もあり、交渉に失敗して二人の意見の差が縮まらないまま会話を展開させる相互行為も観察される。	・女性同士の会話で、「冗談」は一方的に相手をからかうような相互行為で行われるのに対し、男性同士の会話では、「冗談」として相手と言い争うような相互行為が行われる場合もある。

以上の分析結果を踏まえ、次節では§2.2で挙げた研究目的　D）「対立」を解決するための

相互行為と「冗談」の相互行為にジェンダーによる類似点と相違点が見られる理由は何かについて考察を行う。

5. 丁寧さの不足と関係構築

男性同士と女性同士の会話に見られる「対立」と「冗談」の相互行為の差はどこから生じるのであろうか。従来、相互行為とジェンダーの関係を探った多くの研究では、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、相手に同意していることや共感していることを表すことが多いと指摘されている（Edelsky 1981、Holmes 1995、Pilkington 1998）。また、張（2015a）では、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、相手に同意や共感を表す発話の積み重ねが多いと指摘されている。つまり、女性同士の会話では、相手と共通の意見や感情を主張することが、親密な関係構築に重要なPPSの装置として用いられており、相手との一致が親密な人間関係を維持するのに重要な要素であると解釈できる。そのため、相手との「対立」は当然解決しなければならないトラブルと捉えられ、「対立」の発話はトラブル源になりやすく、その後に見られる女性同士の交渉の相互行為は、一致点を探ることが目的となり、共通の目的を達成させるため一致点を見つけ出すことになる。一致点を探っていく相互行為は親密な関係を強化する結果にも繋がると考えられるが、このような女性同士の相互行為に見られる特徴は、男性同士の会話で観察される言い争いのような「冗談」の相互行為が見られず、参加者の一方が相手をからかい、受け手がその発話を否定したり、受け入れたりする相互行為が主に観察されることとも関連する。Yedes（1996:418）によると、からかいは衝突をやわらげ、友好関係を深め、対等な関係をもたらすが、女性同士の会話で表面的には相手のフェイスを侵害する〈不同意〉や〈否定的評価〉が相手との親密な関係を強める「冗談」として用いられた場合、女性は「冗談」としても相手との「対立」は避ける傾向があり、相手をからかうような相互行為を行うことで親密さを表していると言える。

一方、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では、共通の意見や感情を主張する行為は、そもそも親密な関係の構築に重要なPPSの装置として用いられていないため、「対立」は解決すべきトラブル源にはならない。そのため、相手の〈不同意〉に触れなくても、交渉に失敗して意見が異なっていても、特に友人との関係に問題は生じないのである。相手に対するあからさまな〈不同意〉の表明や意見の不一致は、配慮が欠けているようにも思われるが、リーチ（1987:210）によると、丁寧さの不足は本質的に親密性のしるしになりうる。また、Culpeper（2011）が指摘したように、見せかけのインポライトネスは、相手との連帯感を強める機能を果たす。このような現象は、Pilkington（1998）でも指摘されており、Pilkington（1998）は、男性同士

の会話におけるあからさまな反論は、親密感を表すストラテジーであると述べている。むしろ、男性同士の会話では、〈不同意〉や〈否定的評価〉の積み重ねによる言い争いのような「冗談」を通じて、表面的には攻撃とも解釈されるかもしれない態度をお互いに示しつつ、親密な関係であることを表現していると思われる。

すでに §2 で述べたが、親密な人間関係を構築また維持するために用いられる装置がジェンダーによって異なっていると考えられるが、一致が大切な装置として用いられる女性同士の会話とは異なって、男性同士の会話では、あからさまな〈不同意〉や〈否定的評価〉の表明やそれらの発話の積み重ねによる言い争いのような「冗談」が親密な関係の構築に大きな装置として用いられていると考えられる。〈不同意〉や〈否定的評価〉という相手との関係を壊してしまいそうな発話が、男性同士の会話では逆に親密さを表すストラテジーとして解釈できることは、Kuiper（1991）と Daly et al.（2004）でも指摘されている。まず、男性のラグビーチームの会話を分析した Kuiper（1992）によると、性的な侮辱はグループの連帯感を強めるストラテジーとして用いられる。また、会話における俗語の使用を分析した Daly et al.（2004）は、特定の文脈では攻撃的だと捉えられる俗語の使用は、男性同士の会話では親密な人間関係の証拠として現れると指摘している。相互行為のレベルに見られる男性同士の〈不同意〉や〈否定的評価〉の発話の積み重ねによる言い争いのような「冗談」が親密な人間関係を強めるストラテジーとして用いられていることと同様に侮辱的な発言や俗語の使用が親密な関係を強めるストラテジーとして用いられていると言える。

以上のように、相手との一致が関係構築に重要な要素である女性同士の会話では、〈不同意〉と〈否定的評価〉は解決すべきトラブルとして捉えられる傾向が強く、言い争うような「冗談」の相互行為よりは、相手をからかうような相互行為を通じて親密な関係を強めている。一方 、男性同士の会話で〈不同意〉と〈否定的評価〉は、親密な関係を壊す行為として捉えられておらず、必ず解決すべきトラブル源とも捉えられることはなく、むしろ言い争いのような「冗談」は、親密な人間関係を構築また維持するためのストラテジーとして用いられていると考えられる。このようなストラテジーの使用や相互行為にジェンダーによる相違が見られる背景には、どのような装置を用いて、友人に配慮し、親密な関係を構築していくかという親密な関係作りの仕方の相違が要因としてあると言える。

6. まとめと今後の課題

以上、本稿の分析結果と考察は、以下のようにまとめられる（AからDは、2.2節の目的に対応している）。

A）〈不同意〉と〈否定的評価〉発話は、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で多く観察される。

B）女性同士の会話で「対立」はトラブル源になり、女性同士は交渉を通じて一致点を探すことで「対立」を解決する。一方、男性同士の会話で「対立」はトラブル源にならない場合もあり、交渉に失敗して二人の意見の差が縮まらないまま会話を展開させる相互行為も観察される。

C）女性同士の会話では「冗談」は一方的に相手をからかうような相互行為で行われるが、男性同士の会話では「冗談」として相手と言い争うような相互行為が行われる。

D）ジェンダーによる相違が見られる背景には、どのような装置を用いて、友人に配慮し、親密な関係を構築していくかという親密な関係作りの仕方の相違が要因としてあると考えられる。

〈不同意〉と〈否定的評価〉が「冗談」として用いられている場合に用いられるコンテキスト化の合図には日韓差が観察されるが、今後は、冗談フレーム構築という観点から分析を加えていく必要があると考えている。また、〈不同意〉と〈否定的評価〉の対象に注目し、どのような事柄が「冗談」の対象になりやすいのかという観点からの分析も加え、異なる言語・文化による相違点も明らかにしていく必要がある。

会話例の文字化表記

：	音の伸ばし	@	笑い
…	強勢がおかれた音の部分	〈@…@〉	笑いながら
°…°	声が小さくなった発話	＃＃	個人情報
？	疑問表現	「….」	直接話法
〉….〈	発話のスピードが速くなる部分	X	聞き取り不明
＝	途切れなく密着した発話	--------	話題やパートの区分
［ ］	重なり	((…))	筆者のコメント
（数）	ポーズの秒数	[…]	省略
→	注目		

注

1） 会話IDは、左から（1）性別、（2）国籍、（3）会話を区別するための数字であり、話者IDは、左から（1）国籍、（2）話者の個人文字、（3）性別、（4）話者を区別するための数字である。

2） 日本語会話データの文字化は筆者が行った後、日本語母語話者のチェックを受けた。

3） ⅰ.聞き返しのような疑問表現が〈不同意〉を表しているか否かは、文脈や音声上の特徴から判断する。ⅱ.相手の褒め言葉などに対する謙遜を表す〈不同意〉や相手の自己卑下に対する〈否定的評価〉や〈不同意〉は

分析対象としない。

4） 会話の参加形式（発話数とターン数）という観点から、自由会話の単位を設けている。会話の参加形式の面からソロパートとデュオパートに分けているが、ソロパートとは、特定の事柄について情報を持っている一人の話者が話し手になり、複数の発話を用いて語る部分で、話し手と聞き手の役割関係が相対的に明確である部分である。一方、デュオパートとは会話の参加者の実質的な発話数に差がなく、話し手と聞き手の役割関係が明確ではない部分である（詳細は、張（2015b）を参照されたい）。

参考文献

今田恵美（2015）『対人関係構築プロセスの会話分析』大阪大学出版会

大津友美（2007）「会話における冗談のコミュニケーション特徴－スタイルシフトによる冗談の場合－『社会言語科学』10-1:45-55

大津友美（2004）「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス－「「遊び」としての対立行動に注目して－」『社会言語科学』6-2:44-53

椙本総子（2004）「提案に対する反対の伝え方－親しい友人同士の会話データをもとにして－」『日本語学』23-8:22-33.

ジョーンズキンベリー（1993）「日本人のコンフリクト時の話し合い－アメリカ人研究者から見た場合－」『日本語学』12-4:68-74

張允娥（2015a）「同性間・異性間の会話における〈理解〉と〈同意・共感〉－ポライトネスの観点からみる日韓差と男女差－」『日本語学研究』45:65-83

張允娥（2015b）「日韓自由会話の枠組設定の試み―話題と参加形式の観点から―」『待兼山論叢　日本学編』49:57-72　大阪大学文学会

林始恩（2015）『親和的関係における否定的評価の研究：日韓母語話者の言語行動の比較』筑波大学博士論文

本田厚子（1998）「テレビ討論における発話順番取り（turn-taking）システムとコンフリクト表現の相互関係」『大阪大学言語文化学』7:129-146

リーチ，ジェフリー・N.（1987）池上嘉彦・/河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店（Leech, G.（1983）*Principle of pragmatics*. London: Longman.）

Bateson, G.（1972）. *Steps to an ecology of mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

Brown, P. & Levinson, S.（1987）. *Politeness: Some universals in language use*. Cambridge: Cambridge University Press.

Culpeper, J.（2011）. *Impoliteness: Using language to cause offence*. Cambridge: Cambridge University Press.

Daly, N., Holmes, J., Newton, J., Stubbe, M.（2004）. Expletive as solidarity signals in FTAs on the factoryfloor. *Journal of pragmatics* 36: 945-964.

Edelsky, C.（1981）. Who's got the floor?. *Language in society* 10-3: 383-421.

Goffman, E.（1974）. *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Goodwin, M. H.（1980）. Directive-response speech sequences in girls'and boy'task activitities. In Meconnel-Ginet, S. & Borker, R. & Furman, N.（eds.）, *Women and language in literature and society*（pp.157-173）. Praeger.

Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Holmes, J. (1995). *Women, men and politeness*. New York:Longman.

Kuiper, K. (1991). Sporting formulae in New Zealand English: Two models of male solidarity. InCheshire, J. (Ed.), *English around the world* (pp.200-209). Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Maynard, D. W. (1985). How children start arguments. *Language in society* 14: 1-30.

Maltz, D. & Borker, R. (1982). A cultural approach to male-female miscommunication. In Gumperz, J. J. (Ed.), *Language and social identity* (pp.196-216). Cambridge: Cambridge University Press.

Pilkington, J. (1998). 'Don't try and make out that I'm nice! The different strategies women and men use when gossiping. In Coates, J. (Ed.), *Language and gender: a reader* (pp.254-269). Blackwell.

Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica* 7: 289-327.

Schiffrin, D. (1984). Jewish argument as sociability. *Language in society* 13: 311-355.

Straehle, C. A. (1993). "Samuel?" "Yes, dear?": Teasing and conversational rapport. In Tannen, D. (Ed.),*Framing in discourse* (pp.210-230). New York: Oxford University Press.

Tannen, D. (1986). *That's not what I meant!: How conversational style makes or breaks relationships*. New York: Ballentine.

Tannen, D. & Wallat, C. (1993). Interactive frames and knowledge schemas in interaction: Example from amedical examination interview. In Tannen, D. (Ed.), *Framing in discourse* (pp.57-76). New York: Oxford University Press.

Yedes, J. (1996). Playful teasing: kiddin' on the square. *Discourse and society* 7-3: 417-438.

（博士後期課程学生）

（2016年8月18日受付）
（2016年9月7日掲載決定）